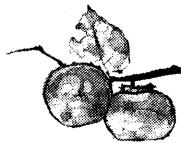


ユートピア

三歳児のかわいいことば



京子 村石

三歳児の生活は、人数も少人数で教師との関係も密接であることから、ひとりひとりの興味や話題が教師に向かって投げかけられることが比較的多い。いつもなにげなく聞いてそれにうけ答えてしまうことが多いが、あんまりかわいいのでそれを記録しておいた中から幾つかひろってみることにする。

三歳児はまだたどたどしくはあるけれど、一応自分たちの生活の中で、自分の使うことばをもって自分の意志や興味を相手に伝えるという機能が果たせる段階に成長して、幼稚園に臨んでいる。そして彼らのことばの中には、三歳児らしい独特の解釈もあつたり、あるいは親からいわれたことそのままの伝達もあつたり、随分古めかしいとばも時折聞かれたり、またそれとは逆に世の中で最近使われだしているもの

がはいつてきたりしている。ちょっとした話題の中にも、世相の反映ともいえるようなものもみられるし、あるいは親の生活態度の現われ、「親は子どもの鏡」ということもみられたりする場合もあつておもしろい。

◆鳥のなまえ

保育室の中に初めて鳥かごをもつてきた日のこと

T 「これ、どうしたの？」
Y夫 「遊びにきたのよ」

T 「あのね、きょうからおへやに

Y夫 「なんて名前？」
T 「これは、きんかちゅうよ。でも、何かいい名前を考えつけてあげてね」

ここで私は、ピースとかチュン子とかいう月並なことばがかえつてくると

予想していたのだが……。

Y夫「それじゃ、カラスにしようよ。

カラス！」

T「？」

その会話を聞いていたN夫、ちょうど庭でわとりがいたのを聞いて、ハッと気づいたらしく、

N夫「あのね、にわとりがいい、二
ワトリー！」

T「？」

N夫とY夫は、それぞれ鳥かごの中のきんかちよう向かって

Y夫「カラス、カラス」
N夫「ニワトリー！」

◆オヤフコウ

I夫の指にささくれができる。

それを私に見せながら、

I夫「ねえ、先生、これいみたいのよ。

何だか

◆現代語

二つ

①ある日、帰りの時間をまちがえたのかA子の母が迎えにくるのが大へんおそらく三十分も待っていた。しんと

T「あら、どうしたのかしらね」

I夫「あのね、これはね、オヤフコ

ウなのよ」

T「え、どういうこと？」

びっくりして聞く私に、N夫はすまして答えた。

I夫「あのね、オヤフコウってご飯

食べないっていうことよ」

I夫は、幼稚園のおべんとうのとき

も途中で席をたって遊び出し、終わりまで食事をすませることが少なかつた。

家でも同様なのであろう。そのことを気にしている母親（あるいは祖母？）の口から出たことばをうけついで説明してくれたものと解釈される。

私は向かって言つた。

K子「ねえ、先生、M子ちゃんのつ

てる——」

してしまった幼稚園、心細げなA子の表情を見て私はなぐさめ顔でいた。

T「どうしたのかしら、A子ちゃんのママおそいわね」

A子「Aちゃんのママ、おそいね」

T「あのね、きっと今いそいでお迎えに来てくれるところよ。

だから、もうちょっと待つてて

ね」

A子「Aちゃんのママ、今きっとあせつてるよ」

②いつもは比較的おとなしいM子が、きょうは気についた遊びが見つけられて、へやの中でうれしそうに大きな声を出して元気に遊んでいる。そのようを見ていたらしく、K子が突然

◆ママのいったこと

聞ができ上がった。

らしい。

昼食の時間に、家の兄弟のことが話題になる。もっぱら、強いとか、何ができるとかいった話題の中で、

H夫「新聞できたよ、先生」
T「見せて」

U子「私のお兄ちゃんね、前はとつてもやさしくって何でもしてくれたんだけど、このごろあんまりしてくれないの。だんだん、悪くなるんだって、おかしいでしょ、先生」

おかげさま、あんまりほかの兄弟のいるところで批評しない方がよいようです。

◆製作の中に見られる一つの着想

H夫が新聞をつくって、まことに家にとどけるという。画用紙にマジックで何か×とか○とかいっぱい書いた

彼にとって新聞を届けるときには、別刷の商店の広告も折り込んでなけれど、ところどころに写真と称して絵もかき入れた。その紙を四つ折にして新

H夫「あっ、あれ、あれ、あれ入れなくちゃ。ほら、買物の何円ですかって書いてあるのをつくるの

わすれちゃた。先生、色の紙かしてね、あれ書くね。あの、卵

S子「かわいそ、きゅううりさん。おぼうそうよ」
T「あら、ほんとねー」

いくらです。トマトイクラですっていうのつくるから……」

S子は二ヵ月ほど前に水ぼうそうになつた。その体験からきゅううりのぼつぼつを水ぼうそうと言つたのだが、これとまったく同じ表現が、松谷みよ子さんの「ちいさいもちゃん」の中に

◆幼児にも幼児文学者と同じ表現が――

保育室で鈴虫を飼っている。朝、なすやきゅうりを時々とりかえているので、早く登園した子どもはそれを見て

いることもある。きょうはきゅうりをあげようと思つて持つてきた。そのきゅうりをじっと見ていたS子は、

S子「あ、先生、きゅううりさん、水

くすりつけてあげてね」

S子は二ヵ月ほど前に水ぼうそうになつた。その体験からきゅううりのぼつ

ある。ももちろんが水痘になつたあとで、きゅうりを水ぼうそうといって、おくすりをつけてあげるというのである。何だか、とても楽しい朝であった。

コロンビア大学のケネス・ワン教授によれば、言語理解（言語保育）のかぎ概念として次のようにあげてある。
〔「幼児の知育」 上野辰美訳 明治図書〕

- 1 シンボル・システムとしてのことば
ことばと表示
- 2 アルファベットと文法
シンボル・文法・構造
- 3 共通の一致としての意味
意味・語

- 4 コミュニケーションとしてのことば
社会的機能

今まであげたいくつかの事例も、あ

る場合は3の範疇にはいつたり、4の役割を果たしたりしていると解される。一つの語でも世間一般で通用しているのと同じ意味でとらえている場合もあるし、幼児なりの独自の解釈をもつて

いる場合もある。幼児との会話はいつもは気づかず過ぎてしまう場合もあるが、その場面場面でとらえてみると、宝石のような美しい表現があつたり、あるいはいみじくも事実を的確にうけとめていることばが発せられたりしている。また新しいことばも時代にのつてどんどんと子どもの中にはいつてきて

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

いるのもわかる。三歳児は、言語機能の著しく伸びる時期であるので、ことにおもしろい。

そして三歳児のことばの収得源といふものは、今までは親や兄弟であったり、友だちであつたりテレビであつたり

することが多いであろうが、これからは、その中に教師というのも大きな影響を与えていくことになる。美しい日本語は美しい心につながり、よい品格をつちかっていくものとなる。ことばというものは教えるものではなくて、子どもの育つ環境の中で自然におぼえていくものであるから、私どもは子どもによい影響を与えるようなことばを使い、楽しい会話を続けたいとまたあらためて感ずるのであった。